

発掘調査の概要

飛鳥寺東南部の調査（飛鳥藤原第152-5次）

2008年11月、飛鳥寺の東南隅、飛鳥寺瓦窯のある丘陵の西で、倉庫建設とともに発掘調査をしました。すぐ北側は1979年に調査されており、飛鳥寺南限の築地塀、掘立柱建物・塀、木樋、石組溝などがみつかっています。なかでも2間×2間の総柱建物は、道昭が飛鳥寺の東南隅に建立した東南禪院の経蔵として注目を集めました（現在は万葉文化館のある飛鳥池遺跡の北側とみる見解が有力です）。そのすぐ南を発掘することから、当然これらの遺構の続きがでてくるものと思っていました。しかし予想に反して、これらはまったく姿を現しませんでした。

かわりにみつかったのが、飛鳥寺の南方にあった通称「石敷広場」の東北コーナー部です。西に向かって北に約8度方位が振れる幅約20mの石敷です。北縁と東縁には大型の石を据え、その内側には川原石を敷いています。注目されるのは、石敷広場のすぐ東側にあった階段状の石組溝です。最上層では幅2.6mもある巨大なものでした。この石組溝は北へと延びていきますが、1979年調査区ではみつかっておらず、その行方が気になるところです。

それにしても、石敷広場の正体は何でしょうか。飛鳥寺は正方位にのっとって造営されていますが、なぜか石敷広場は方位が振れています。飛鳥寺の西には「楓の木広場」があり、さまざまな儀礼の場として機能しました。飛鳥の宮殿と楓の木広場を最短ルートで結ぶため、方位が振れたのでしょうか。

（都城発掘調査部 市 大樹）



石敷広場の東北コーナー部(西から)

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第156次）

石神遺跡は齐明朝の饗宴施設と推定されますが、それ以外にも7世紀代を通じて造営が繰り返されたことが明らかになっています。

今回の調査は、遺跡の東限とその周辺を明らかにするのを目的としました。調査は10月から始まり3月まで続きました。その結果、7世紀前半と後半の2回の整地土の上に重なり合う掘立柱建物や塀などの遺構が多数確認されています。みつかった遺構の変遷は、8時期に分けられます。

今回の調査区の北側にある昨年度の調査区では、7世紀中頃とみられる南北方向の建物が確認され、これを石神遺跡の東限施設と推定しました。今回、この建物の続きとみられる大型の総柱建物を検出しました。さらにこの総柱建物以前にも、ほぼ位置を同じくする塀と建物を検出しました。このように、7世紀前半から中頃にかけて、東限を区画する施設は2回の建て替えがあったようです。また東限区画施設の東側には、遺構の展開が希薄で、ここに幅16m程度の通路が存在したと推定されます。

さらに、東限区画施設よりも古い南北方向の溝を確認しました。この溝はクランク状に折れ曲がり、基壇をともなうと考えられます。この溝からは大量の瓦が出土しました。この瓦が葺かれていた建物は、もしかすると仏教施設だったかもしれません。7世紀後半にも再度の大規模な整地をおこない、東限施設も通路も消え、建物や塀が点在するようになります。このことからも遺跡の性格が7世紀後半に大きく変化したことがわかりました。

（都城発掘調査部 青木 敬）



7世紀前半～中頃の東限施設群(北から)